考古アラカルト48

特別展示

京都 秀吉の時代

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

京都は平安京遷都以来、今も都市として生き続けています。この間、幾多の激動の時代を経ながらも、日本文化の中心地として不動の位置を保っています。それは、今の京都が平安京造営時の碁盤の目の区画を踏襲しながらも、各時代を象徴する建築物が多く現存していることからもうかがえます。

今回の特別展示では、京都を大きく変貌させた時代の一つとして、「秀吉の時代」を取り上げました。関白となった秀吉は、京都あるいは日本を、どのように変えようとしたのでしょうか。

聚楽第、御土居、大仏殿、伏見城などの遺跡を発掘調査成果からながめてみます。秀吉の時代が、わずか十数年間の出来事にもかかわらず、各々の規模もさることながら、独創性や斬新性は他の時代を圧倒する感があります。

エントランス展示　秀吉の時代は、茶の湯と黄金の時代といっても過言ではありません。フロントケースには、聚楽第武家屋敷跡から出土した黒茶碗と金箔道具瓦、伏見城跡出土の志野水指や金箔瓦の破片を展示しています。

メインケース展示　聚楽第・伏見城の武家屋敷跡出土の金箔瓦や鬼瓦、方広寺・本能寺跡出土の特徴的な瓦類を展示しています。

方広寺跡出土品の展示　方広寺跡の調査は1994年から始まりました。2000年の大仏殿跡の調査では基壇を検出し、その規模がわかりました。方広寺に葺かれていた瓦とともに大仏殿の太閤瓦（大仏瓦）と呼ばれる大型の瓦を展示しています。瓦を留める大小の鉄釘、銅製の鐶杖なども見つかっています。右写真は、大仏殿跡の調査で検出した南階段の耳石と、基壇の羽目石・地覆石。

伏見城武家屋敷跡　1986年に伏見区桃山町金森出雲で武家屋敷の門跡を検出しました。焼け瓦の中には金箔瓦もあります。

伏見城武家屋敷跡出土品の展示　伏見城下には全国の大名の屋敷が多数配置されていました。伏見区桃陵町の武家屋敷跡から多量の金箔瓦が出土しました。残存の良いものが多く、漆を接着剤として金箔を貼り付けているのが見て取れます。

パネルと漆器関連の展示　伏見桃山城運動公園にある模擬天守閣に復元されている「黄金の茶室」と、茶室「待庵」の復元模型写真。ケースには、黄金の台子（複製）と中京区塗師屋町で出土した漆器と道具類を展示しています。下段は、塗師屋町近隣の東八幡町から出土したタイやベトナム産の焼締めの壺で、内面には漆が付着していました。漆壺は南蛮貿易で輸入したものです。